

はたらく気持ちを維持するために

廣池千九郎エピソード 相手の身になって行動する



廣池千九郎エピソード④
『まごころを引き出す』
モラロジー研究所
本体1,000円+税

お求めは
巻末の専用ハガキ、
または▶から



はたらくことの意味

この数か月、新型コロナウイルス感染症の拡大や豪雨による災害などによって、人間としての無力さをまざまざと実感することになりましたが、逆にこのような状況だからこそ気づけたこと、あらためて考え直せたことも多くありました。

人として「はたらくこと」の意味とはなんなのか、という問いもその一つです。春日大社の宮司を務めた葉室頼昭氏によれば、現代では「働く」とは「労働」だと考えられ、辛く苦しいものと考えられる傾向にあります。本来「はたらく」の「はた」は周囲のこと、「らく」は楽にする、楽しませることだといえます(参照『ほんよいくに』富山房インターナショナル)。

楽しいことは長続きしやすいので、比較的簡単に「はたらく」気持ちを維持できます。また、楽しむ余裕ができれば、工夫する心を持つことができ、ますますはたらくことが楽しくなります。

はたらくのはなんのため？

しかし、実際には、会社で思うように

博士の廣池千九郎(一八六六―一九三八)の側近だった水野節子氏は、廣池から教わったことを次のように述べています。

「お茶ひとつお出しするのでも、時と場合によって、熱いを出したり、ぬるいのをたっぷり入れて出したり、冷たくして出したり、すべて相手の身になってすることを教わりました」(廣池千九郎エピソード④『まごころを引き出す』モラロジー研究所 七四頁)

ここでの喜びの軸は「相手」にあります。暑い日に冷たいお茶を出したからといって必ず喜んでもらえるとはかぎりません。冷房の効いた部屋で冷たいお茶を飲んできた方にとっては、温かいお茶のほうがうれしいかもしれないのです。

さらに、次のエピソードからは、廣池の「おもてなしの心」の勘所を学ぶことができます。

「霧積温泉のような山の中でも、(廣池)博士の指導を受けに来られる方はずいぶんあります。博士は『せっかく来たんだから、心からもてなせ』と言われます。そして、若い人がいらっしやるのがいちばんうれしい様子でした。だから『今日は若いのが来るからなあ、若いのが来る

成果が出なくて行き詰まったり、家事が面倒になったりするのも事実です。そのようなときはなかなかやる気が上がりません。

そもそも私たちは、なんのためにはたらくのでしょうか。報酬を得るためというのは、現代社会の仕組みではうなずけることです。しかし、それだけでは、はたらくことで自分自身の人生を輝かせることは難しいのではないのでしょうか。

哲学者の鷲田清一氏が「成年のあいだは未来のために働き、老後は過去によってかかって生きる。どちらにも、(現在)の充溢というものはない」(『だれのための仕事』講談社学術文庫)と述べるように、未来の自分や過去の業績を頼りにしたはたらく生き方では、現在の自分が充たされることはなく、今このときを楽しむ気持ちになりにくいものです。

そこでヒントになるのが、喜びの軸を自分軸から相手軸に変えて行動するという考え方です。

相手を思いやる心で

総合人間学モラロジーの創作者で法学

からなあ』と言われて、博士はじっとしていられないのです。お勝手をのぞきに来られて『あれをつくってやれ、これをつくってやれ』とおっしゃいます。また、お客様がいらっしやると『疲れて来ているんだから、まず風呂へ入ってもらえ。少し休ませてあげなさい』と言われて、お客様をよくいたわるようにしていらっしやいました」(同上、七四―七五頁)

大切なのは、相手の立場に立ち、どうしたら相手が楽になるかという、思いやりの心をはたらかせることでしょう。

このように、行動の軸を相手中心に変えることで、報酬や評価という他人から与えられる幸せでは得られない、自分自身の心の充実が得られるはずです。この心の充実こそ、はたらく気持ちを維持する原動力となるのです。

ただし注意点が一つ。相手のためを思って行動しても喜んでもらえなかったときにどうするかです。そのようなときは、相手にとって本当に心地よい対応だったかを自分自身に問いかけ、省みる必要があります。どこまでも相手軸に立つてみることで、ますます気持ちよく「はたらく」ことができるはずです。(本誌)